
乙女ゲーマーな彼女

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女ゲームな彼女

【NNコード】

ZZ9944ZZ

【作者名】

詩音

【あらすじ】

才色兼備その言葉が似合ひ、田舎に似つかわしくない生徒会長である彼女。それに対して、俺は一般生徒。俺たちに関係性なんて今も、これからもないもの、そう考えていた。だけど、ある日偶然向かつたゲームショップで生徒会長を見かけてしまい、彼女の秘密を知つてしまつ。そして、俺と会長の妙な関係がスタートするのだった。

〇回目 プロローグ

才色兼備なんて言葉がぴたり合うような人間、この世界に本当にいるのかと考えたことがある。どんなに素敵な人でも、多少なりとも難はあるものだ。

それは、テレビを見ていてもわかることだろう?

どんなに綺麗な人でも、性格がいいとは限らない。

どんなに頭のいい人でも、容姿が端麗とは限らない。

だけど、そんな考えの俺でもこいつは本当に完璧なんだろうなと思ってしまう女がいた。

彼女は田舎の学校の生徒会長で、俺とはクラスも違う。だけど、彼女の話が俺のクラスまで届かない日はなかつた。まあ、一クラスしかないから普通かも知れないけど。

それでも、彼女は完璧だった。噂ですら、彼女の魅力を伝える手段としかなっていない。彼女の批判をするような人間なんて、ゼロに等しかつた。

例えば、生徒からの要望。

彼女はそれが可能なことであれば、一人で校内を駆け回り、その実現を求めた。そして、実際に実現させた。

それが不可能なことであれば、要望を出してきた人にテキトウな返事をするのではなく、その人がどうしてそれが不可能なのか理解できて、後々色々なことを思つてしまわないような完璧な返答を返した。

異常な行動力、そして、そんな彼女の行動を支えてくれる人材を集め、それを率いるリーダーシップを彼女は持っていた。

そんな人間が、どうしてこんなに田舎の学校に納まっているのか、とか思ったこともある。

だけど、そんなこと考えたって俺が知ることは出来ないもので。俺に出来るのは、遠めに彼女の活躍を見ていることくらいだった。

成績も全国トップクラス（うちの学校で勉強してないところも更々と解いてしまう）、美女というわけではなく、可愛い寄りだが、それもこれから綺麗になるのだろうと期待を持てるような可愛さ（）彼女と一緒に市内に出かけたと話をしていたクラスメイト曰く、男性から声をよくかけられるそうだ）、身長は157cmと小柄だが、それを感じさせない何かを持っていた。

だから、これは本当に偶然なんだ。

俺は、何も悪くない。

たとえ、ゲームショップで会った彼女が左手にゲームを持って、右手の人差し指を俺に向けて、泣きそうな顔をしていたとしても、俺は悪くないのだ。

「あ、ああ、あんた……学校の……」

「……どうも」

泣きそうな彼女……生徒会長は、フルフルと身体を震えさせ、左手からゲームを落とした。カシャンと軽い音がその場に響く。

ああ、俺、どうしたらいいんだろうか……

これが、俺、時一時と、彼女、生徒会長である少女岡本花火の始まりだった。

1回目 ゲームショップにて

何が原因で、俺はこんな目にあつていいのだろうか。

日曜、暇を持て余していた俺に、母さんが市内に買い物に行くと
いつので来ないかと誘つてきた。

そして、俺はその誘いに乗り、四十分ほどかけて車で田舎の町か
ら市内にまで遊びに来たのだ。

母さんの目的はDVDを借りに来たことだったが、俺は特にDVD
に興味がなかつたので、一人レンタルショップの正面にあるゲー
ムショップに来ていた。

ゲームショップの中は人も多くなく、店内を俺はテキトウに歩き
回つていた。

そんな時だつた。彼女を、見つけたのは。

最初は、誰かわからなかつた。

ふらふらと歩いていて、角を曲がつた場所で、じつとゲームを見
ている少女。

160cmもなさそうな小柄な可愛らしい少女だった。

俺は、最初は、可愛い……と、ぼんやり考えただけだった。だけ
ど、その少女をどこかで見たことがあることにふと気がつく。

そこで、どこで見たかなあ……と考えた。

その結果、俺は一人の名前を頭に浮かべるのだ。

岡本花火という、才色兼備なうちの学校の生徒会長を。

最初は、そんなわけがあるはずないと考えた。だつて、普通に考えてわかる話だ。学校で習つてもないような勉強をスラスラと解いてしまう様な、生徒会の仕事を持ち帰つて一人ですべてこなしてくるような人間に、家でゲームなんかする時間があるわけがないことくらい。

だから、こんなところに彼女がいるわけない。これは、他人の空似だ。

そう、思うことにしたのだ。

なのに、そんな俺の善意を彼女はわかつてくれなかつた。

品定めを終え、一本のゲームを手にした彼女は俺の方向を向く。多分、レジに行こうとしたんだね。ニコニコと笑う彼女は、かなり可愛くて、魅力的だった。

そう、俺が、もう少し早くここを離れておけばよかつたんだ。だけど、それが遅れてしまい、彼女と顔を合わせることとなる。

ここで、冒頭に戻る。

「あ、ああ、あんた……学校の……」

他人のフリをしてくれてもよかつたのに、俺に人差し指を向けて、彼女はそんな言葉を発してしまつのだ。

流石に、ここで無視をするわけにもいかなくて、「……どうせ」と俺は返事をする。

そして、彼女は笑顔から一転、泣きそうな顔をして、左手からゲームを落とす。カシャンと軽い音が響いた。

それから、なかなか動かない彼女。俺はどうしようかと考えたが、

とりあえず落ちていいゲームを拾おうとしたがんと手を伸ばした。

「だ、駄目！！」

「え？」

そう、彼女が叫んだが遅かった。俺は、ゲームを手にしてしまった。

そして、タイトルを見てしまった……『恋の処方箋』と書かれて

ついでに、主人公らしき少女が滅茶苦茶キラキラした美少年三人に囲まれたパッケージも。

……これが何のゲームなのか、なんとなく察することが出来た。

これは、あれだ。

乙女ゲームってやつだ。

所謂、ギャルゲーの反対の物だ。

ギャルゲーは基本的に男性に販売することを目的とした、男の主人公が可愛い女の子と恋愛するゲーム。

乙女ゲームはその逆、つまり女の主人公がかっこいい男の子と恋愛するゲームだ。

……なんで、そんなものを生徒会長が……

いや、そりや、プレイするために持ってるんだろう。

買おうとしてたんだから、当然だ。

でも、会長がこんなゲームを？

正直、考えられなかつた。

なら、間違えて買つたつてことは？

……いや、物凄くじっくり品定めしてたんだった。

そんなことを考えながら、じつとゲームのパッケージを見ていたら、パシッと軽く頭を殴られた。

痛くはないけど、びっくりした。

呴いたのは、勿論生徒会。

会長は泣きそうな顔で、可憐に、黒田がちな瞳美で俺を睨んでいる。

そういえば、いつもは低い位置でツインテールなのに、今日は高い位置でポニーテールなんだな。

「そ、そんなに見んなつ！」

また、妙なことを考えていたら手からゲームを取られた。

会長は、ゲームをぎゅっと胸元に抱き寄せる。

「……な、何のゲームかわかった？」

会長は恐る恐るといつた様子で俺にそんなことを尋ねてくる。ここで、ノーと呟つても多分会長は信じないとなんとなく俺はわかつていた。

仕方ないので、素直に頷く。

「つ……」「これは、あれよーあ、あくまで私の暇を潰すための道具で……い、息抜きみたいなものよー。」

その言葉は、どう聞いても趣味でやっているとしか聞こえなかつた。

だつて、忙しい会長がわざわざ暇を見つけてゲームをしてくるといつのだ。

会長なら、読書でもしているかと正直思つていた。

「いや、いいよ。好きなんだろ?」

「つづつ……す、好きとか、そういうのじゃない……」

必死で否定しているが、大事そうに抱きかかえられたゲームを見ていると、会長の言葉が真実とはとても思えなかつた。

「いや、いいです。俺、人には言つませんから。それじゃあ、さよなら会長」

そう、会長の言い訳なんて聞く必要はないんだ。

知つているけど、知らない。もともと、俺と会長に深いかかりはないんだから、じつで話はお仕舞いにすればいい。それで、正解だ。

そう思つて、俺は会長に背を向けたのだけれども……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944z/>

乙女ゲーマーな彼女

2011年12月30日22時51分発行